

議長（中田文夫君） 日程第1 一般質問を行います。

通告順に発言を許します。

5番 竹島ユリ子君。

5番（竹島ユリ子君） 皆さんおはようございます。

私は、通告してあります舟橋村誌第3版の発刊について質問いたします。

舟橋村誌として、初版が昭和3年、第2版が昭和38年と出版された経緯があります。その後、第3版の発刊が浮上しつつも、実現することなく今日に至っております。

舟橋村は町村合併に参加しないで、単独村政という選択肢を採択し、再度歩み続けることとなったわけですが、さきの全国市町村合併の推進によりまして、ついにこの3月、日本一小さな自治体と相なりまして、今注目されているところであります。となれば、「山椒は小粒でぴりり」のごとく、自分や他の方々にもこの舟橋村が文字どおり住みよい村としても日本一と実感していただけるよう、村民各位のさらなる御協力をお願いしなければなりません。今回、改めて第3版の発刊ということについて検討していただきたく、ここに提案するわけでございます。

皆さんも御存じのように、「温故知新」——古きをたずねて新しきを知る。こうしたことわざにもありますように、舟橋村が歩んできた激動の変遷をかいま見ることで、新たなものを構築していくことが、今改めて私たちにとって必要なことではないでしょうか。いずれ次代を担っていかれる新しく住民となられた皆さん方にも、舟橋村の歴史を認識していただくよい機会にもなります。歴史を語り継いでいくことの大切さ、今日を築き上げてこられた先人たちに対する敬いの心、そしてまた核家族化と言われる現代社会において、いま一度見直していただき、人と人とのつながりの大切さ、このような思いを目的に、ぜひ第3版の発刊を期待するものです。発刊の必要性についてどのようにお考えなのか、40有余年を経た今日の経緯と現状、そして今後の指針について村長にお伺いさせていただきます。

先般、ふとしたことから、村誌の1ページに触れる機会がありました。

昭和3年11月発刊の初版は、当時、国の勢力が充実された時期であり、愛国心、郷土愛が最も高揚しつつある時期であったそうです。したがって、郷土誌のようなものが編さんされる機運が徐々に高まりつつあるころだったようです。

次いで、35年を経た昭和38年の11月が第2版の発刊となっております。実際に、昭和34年が市町村施行70周年の記念年でもあり、また初版が発刊された昭和3年以

降の村政発展状況を記録する必要性の痛感もあり、その記念事業としての第2版発刊を計画されたとありました。

当初、村勢要覧をまとめた程度のものと考えておられたようですが、いざ手がけてみたところ、いろいろな要望も出、また各方面からも要望があって資料もたくさん集まり、整理するだけでも大変だったそうです。その結果、予定より遅れはしたものの、昭和38年11月に曲がりなりにも専門家の手によらないで、かかわった方々すべてが当然自分の責務としての自覚を持って、忙しい本務の合間を利用して作業に当たられ、発刊の運びとなったと記してありました。

平成8年には、館鼻先生が生涯学習の一環として「舟橋村物語」と題して、舟橋村の歴史をわかりやすく、8ページにわたるパンフレットとして作成され、私たちに紹介くださった経緯がございます。これも大変すばらしいものに仕上がっております。目を通しますと、まさに郷土で生き抜いてこられた先人たちの血と汗と涙でたくさんの障壁を乗り越え、次代に引き継いでいらっしゃった生活そのものがかいま見えました。今そうした先人の苦難の足跡に思いをはせたとき、やはり改めて感謝の念が込み上げてきます。

人間、両親、祖父母、曾祖父母と10代をさかのぼれば、何と1,024人の縁があって今の自分がここに存在するわけです。そのうちの一人が欠けても、今の自分がここに存在し得ないという事実、そうしたいにしえの計らいを、今に生きる私たちに脈々と託された先人の思いがあってこそ、今こうして舟橋の地に根をおろし生活させていただいているということへの縁を感じずにはいられません。同じように、次代を担っていく子どもたちも、きっといつかはそんな思いをはせる日が来ることもあるのではないのでしょうか。

インターネットのとある書き込みにこんなことが書いてありました。

読み上げてみますが、「ここ現代のありとあらゆるすさんだ意識が拡散する中では、人と人との連帯や心のつながりは消え、すべては金銭で片づけられるいびつな社会にしかないのは当たり前だと思います。私たちは、子どもに物を与えることが愛情の表現であると思っていることが少なくありません。しかし、本当に大切なことは、心のつながりなのではないでしょうか。もし私たち自身も周りの人から大切にされ、また同時に社会の人たちを自分の家族のように思うことができれば、私たちの心はもっともっと豊かになると思います。

人間の幸せの原点として、このつながりを感じる力を挙げたいと思います。反対に、

この人としてのつながりが切れたときに、私たちの心は崩壊します。人間としての生きる道が破壊されつつある今日、次の世代を担う子どもたちに私たちは何を伝えようとしているのでしょうか。そのことを真剣に考えてみたいと思います」とありますが、いかがでしょうか。

今、先人の苦勞に触れ、思いをはせ、今ここにいる自分自身がいかにかその思いを受けてここに存在しているのか。そして、人のつながり、ましてや先人たちのつながり、その部分を断ち切ってきたゆがみが、この現代社会をゆがめていると思わずにはいられません。私たちは、次代に伝える義務があると痛感するわけでもございます。まさしくつながりを感じる力を見出せはしないでしょうか。

きっと村誌には、2代、3代の先人の軌跡しか伝え切れないでしょう。でも、最も身近に感じる事が可能な存在でもあります。

平成元年より現在に至るまで、宅地開発により、あの穏やかな景観として私たちをいやしてくれた田園風景も、今ではベッドタウン化とさま変わりしました。人口の約6割近くが新規転入の住民の皆様であります。そうした皆様方も、何かの御縁があってこの地にいらっしゃったわけでございます。大きくさま変わりを果たしてしまった舟橋村ですが、やはり先人の苦勞があっての今があるんですよということを認識していただくこと。そして、今いる全住民の皆様も、いずれは先人として次代を担う子どもたちから思い懐かしみ、尊ばれる日が必ず来るわけでございます。

そして、何より今ここにいる私たちがこうした意識に立ち返り、改めて先人たちへの感謝、自分たちは縁があってこの地に一緒に暮らしているんだという思い、そして先人とのつながり、人と人とのつながり、次代を担う子どもたちへの教育的観点からも、例文で紹介させていただきました人間の幸せの原点としてのつながりを感じる力、このことをはぐくんでいただきたい。そんな願いも込めながら、ぜひ村誌第3刊の発刊を願うわけでございます。

そして、快く賛同をいただき、着手となりましたならば、その折には、まずこうした目的意識を明確にさせていただき、計画、素案づくり、制作実現に向け、確かなものを形成していただきたいと思います。

そこで、作成するからには、やはりこうした思いがしっかり盛り込まれ、舟橋村誌らしい珠玉とでもいいますか、すぐれた一冊を完成させていただきたいものです。そのためには、ぜひこの仕事を継続的に担当するポスト、すなわちプロジェクトチームを構成

され、待望の第3版の発刊実現へと事を進めていただきたいと願っております。

以上、発刊のお考えについて、今までの経緯と現状、今後の方向性も含め、村長にお伺いいたします。

以上。

議長（中田文夫君） 金森村長。

村長（金森勝雄君） おはようございます。

5番竹島ユリ子議員さんの御質問にお答えいたします。

御質問の要旨は、村誌第2編が昭和38年に出版されてから40有余年がたっている。村の人口増施策によりまして、10年余りの間に人口が倍増し、新住民の割合が50%を超えるに至っているということなどから、新しい視点に立って、村の歴史を語り継いでいく手段となります村誌第3版の発刊についての問いと理解しているわけでありませう。

まず、発刊の必要の有無につきましては、竹島議員さんが語る必要性を述べられた趣旨、御提言に賛意するものであります。

私は、最近出版されました町村史につきまして、編さん状況を調べてみました。

1つには編さんの事由、次は編さんにかかわる事務局体制、次に専門職員等の設置及び人員、次に編さん期間、次に印刷製本、次に編さんにかかわる経費等、以上の項目であります。

編さんの事由といたしましては、新町制50周年記念事業として取り組んだと。市町村合併によって事業に取り組んだというふうに伺っている次第であります。

事務局体制につきましては、臨時職員以外に正職員を配置したとか、専門職員等では編さん委員会を設置し、編さん委員、あるいはまた調整専門委員を別に委嘱した。

編さん期間につきましては、3年から5年の歳月を要した。

印刷製本では、本文700から900ページを費やした。

編さんに係る経費といたしましては、正職員人件費を除きまして約5,000万円がかかったということをお答えいただいたところでございます。

そこで、村誌第3版の発刊にかかわる今までの経緯を、私の知る範囲でお話しさせていただきたいと思うのであります。

昭和60年代には、村有志の方の心意気で発刊の機運が高まり、取り組みが始まったところであったんですが、途中で中止になった。また、議会全員協議会で当局から村誌

編さんを前向きに検討したいと約束するような発言があったことも了知しているところであります。

その後、歴史に造詣が深い前教育長の館鼻先生が、生涯学習用の小冊子で村誌にかわるミニ版とも言える「舟橋村物語」の前編を平成6年に、後編を平成8年に発刊していただきまして、ただいま活用させていただいているところでございます。

御存じのとおり、舟橋村が誕生いたしましたのは明治22年、市町村制が施行されてから、今年には117年目を迎えることとなります。この時期をとらえ、何らかの意思表示をするのが賢者であると考えますが、議員さんも御承知のとおり、今年度耐震調査を行います小学校校舎、体育館の改修事業が本村の当面する大型プロジェクト事業として控えているのであります。目下、この事業を含め、財政需要増のために鋭意財源の留保に努めているところであります。今後とも、厳しい財政事情にあることを御理解いただきたいのであります。

ただいまのところ、発刊の時期等を明言することはできませんが、必要性を十分認識しておりますので、今後、議員の皆さんと協議して進めてまいりたいと思っております。大変簡単ではございますけれども、私の答弁にかえさせていただきます。